おおいた

かはら版

発行：大分県医療ソーシャルワーカー協会 Vol.42

2013.9.14-15　リレーフォーライフ大分

リレーフォーライフ大分　9月14-15日

今年で6回目となるリレーフォーライフ大分が、9月14日・15日に行われました。当協会は理学療法士協会との混合チーム「チーム士（サムライ）」として第2回大会から参加しています。今年は厳しい暑さとの戦いとなりましたが、みんなで力を合わせ、24時間無事にタスキを繋ぐことができました。

会場の大分スポーツ公園大芝生広場には、日々がんと闘っているサバイバーさんをはじめ、参加者の熱気が溢れていました。一人一人が大切な誰かの事を思い、がん撲滅を祈りながら一歩一歩歩く姿は、とても力強く感じました。

この2日間で感じた仲間との絆、感動、そして楽しさを、また来年、一人でも多くの会員の皆さんに体験していただきたいと思います。共に頑張った理学療法士協会の皆様をはじめ、参加された全ての方々、本当にありがとうございました！

ネットワーク推進部担当理事（塚川第一病院）　小城英樹

第14回げんきフェア　10月13日

平成25年10月13日（日）全労済ソレイユにて「第14回げんきフェア」が開催されました。げんきフェアとは、大分県保健医療団体協議会（10団体）主催で毎年開催されている広報イベントです。

今年は、加藤誠さんより「アンプティーサッカーに出会えて」というテーマで公開講座が行われ、障がい者スポーツについて当事者の方の生の声を聴かせていただくことができました。その後は毎年恒例の各団体の紹介展示が開かれました。

まだまだ一般来場者の方が少ないことなどに課題はありますが、今後とも、専門職団体の普及・啓発に向けて、げんきフェアに参加していければと考えています。又、ご協力いただきました協会員の皆様にはこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

事務局（黒木記念病院）　小川英彦

ソーシャルかふぇ（第1回地区コミュニティ会議　九大地区開催）　10月19日

ネットワーク推進部による、今年度第1回目の「地区コミ会議」を済生会日田病院で開催しました。これは①地区単位でのネットワークの育成②協会役員・幹部との懇親と意見交換の機会を目的として、今年度より開始した事業です。“ソーシャルかふぇ”と銘打ち、従来の研修やグループワークと違い、お茶でも飲みながら…と楽しく気軽に参加できる内容としています。

今回、①ワーカーとして「やりがいを感じたこと」②おもわず「やらかした事」（失敗を通じての学び）を題材に、ベテラン・新人問わず語り合っていただきました。

- **悩んでいることは自分だけではなかった、とたくさんの気づきを感じました。**
- **失敗や成功から学ぶこと、また体験したからこそ身になることがわかりました。**
- **自由に話せる雰囲気の集まりをまたぜひ企画してほしいと思います。**
- **失敗談などに触れ、日頃すごいと思っている大先輩も身近に感じました。**

この地区コミ会議での集まりをきっかけに、各地区単位でのミニ研修や懇親会の企画などの地区活動の活性化につながればと思っています。来年度にかけて他の地区にもお伺いしますので、会員の皆さん、新人、ベテランを問わず気軽にご参加ください。

ネットワーク推進部担当理事（帰巌会みえ病院）　茅野正幸

九州医療ソーシャルワーカー研修会　第50回記念みやざき大会　11月2日-3日

急性期・回復期・維持期のそれぞれ機関の中で行われている実践を聞き、改めてMSWは患者の生活の視点をもち、多方向から支援していく専門職だと感じました。また、MSWとして患者に対して行った支援を理論やアプローチに落とし込んでまとめ上げている発表を聞き、素晴らしいと感じました。私自身の実践を振り返ると、根拠が曖昧な部分も多いので、今後は理論等に根拠を落とし込んでいけるような専門職になりたいと思います。

別府リハビリテーションセンター　工藤 麻衣

活動報告

災害ソーシャルワーク研究班では、この夏、有志の班員で石巻市の活動に参加し被災地の方々に関わって来ました。現地は、物理的には復興しつつありましたが、生活はより重層的な問題に直面していました。被災生活を現実の中に見て、息遣い・温度・匂い・雰囲気など、報道では知り得ないものがあるのだと改めて感じました。「復興は未だならず」と言われますが、復興とはそれぞれ全く違う意味があり、SWは、この個別の「復興」をサポートしていくのだと思います。当研究班は、これらの経験を踏まえ研究を進めて行く予定です。**災害ソーシャルワーク研究班担当理事（別府医療センター）今尾 顕太郎**

活動参加前、私は「石巻に行くのだ」「被災地へ行く」「被災者を支援する」というように、意識をしすぎている部分がありました。確かに、甚大な被害をもたらした今回の震災は、災害支援の視点抜きには考えることができませんが、現地に住む人々は被災者である前に、一人の住民であり、母親であり息子であり、おばあちゃんなのです。ケース訪問をした際に色々なお話を伺いましたが、どれも日常を切り取ったようなお話で、訪問を終えた後、対象者を“被災者”として見ていなかったことに気づきました。それほど震災の影響が少しずつ落ち着いてきたということかもしれませんが、私たちが普段から大切にしている価値と同じであり、関わる姿勢も変わらないのだということを非常に強く感じました。

また、ソーシャルワークが何かもまだ良く分かっていないような2年目の私に何ができるのか、活動の前はそればかりが頭にありましたが、今では自分にも何かできると意図的に“思い込むこと”にしています。もちろん、思い込むだけではだめですが。私が参加してしまったら反対に現地に迷惑をかけるのではないかという不安が最も強かったのですが、“感じること”は誰にでもできるのだと思いました。それほど得るものが多く、重みのある時間でした。

大分医療センター　谷山 香菜恵

2011年に日赤のこころのケア班で震災1ヶ月後に石巻市で活動、1週間という短い活動期間で十分な活動ができたか疑問でした。その後は被災地から遠く離れた九州で、被災地の記事に関心を持ち、機会があればもう一度活動できないかと思ってましたが、今回その機会を頂き活動することができました。

活動内容は、仮設住宅を回って医療福祉の相談窓口があると啓発する活動、住民からの情報収集や継続ケースの訪問支援等でした。ケースの継続支援に関しては、クライエントの不安を傾聴し社会資源の紹介等を行いました。

震災から2年半が経過し、自宅を失って親戚の家に身を寄せ、その後仮設住宅ができると入居、今度は復興公営住宅への転居が待っているというように、数年の間に激しい環境の変化があり、これは例えどんなに健康な人でも適応するには厳しく時間がかかり、適応できず精神的に追い込まれる人もいるだろうということは容易に想像できる。それを子どもや高齢者等社会的弱者が行わなければならない現状を、私たちMSWは知り、理解し、受け止め、専門性を生かした支援をすることはとても重要で意味のあることであり、今後仮設住宅から復興公営住宅に移る期間、またはその前後の期間の支援の必要性を強く感じました。　**大分赤十字病院　徳丸 茂史**

報道等だけではわからない被災地の現状や被災者の方の思い、力強く生活されている様子を目の当たりにでき、活動させていただき本当に良かったと思っています。

活動の中で仮設住宅を回ったのですが、僻地にある仮設住宅は、生活する上で不便なことが多い環境にあるにも関わらず、その場から離れて他の地域では生活したくないという住民の方の思いもあり、このような方たちに対する支援は継続して必要だと感じました。　震災によってそれぞれの取り巻く環境が変化していく中で、9月より復興住宅への入居手続きが進んでいきますが、仮設住宅で暮らされている方々がまた別々の復興住宅へ入居されることによって生じる新たな問題に対しても対応していかなければならないと感じました。　**畑病院　荒金 智子**

私は今回初めて現地活動への参加をさせて頂きました。きっかけは、災害ソーシャルワーク研究班の一員として取り組む中で資料やメディアの情報だけでは分からないことが多く被災地の生活状況も見えてきませんでした。その中で実際に現地ではどのような活動が展開されて支援が行われているのか、自分自身が支援者の一人として携わり実感したいと思ったからです 。

短期間でしたが、多くの仮設住宅、被災地域を訪問させてもらい、今なお仮設住宅で生活をされている方が多くいること、震災当時の壊れた建物が今なお存在することなど、2年以上経過した今でも震災による影響、生活再建を多くの方が必要としていることは、大分では感じることが出来ない体験だったと思います。また、震災の恐怖さも現地にいることで痛烈に感じました。同時に実際に被災した方々、亡くなった方々には計り知れない恐怖であったのだろうと実感させられました。この貴重な体験は遠く離れた大分においても風化させることなく、また教訓として研究及びソーシャルワークに取り組んでいきたいと思います。

大分記念病院　園田 淳司

「平成26年度診療報酬改定の基本方針（骨子案）」

厚生労働省は11月8日、社会保障審議会の医療保険部会と医療部会を相次いで開き、両部会で「平成26年度診療報酬改定の基本方針（骨子案）」を示しました。 冒頭の「基本認識」では「地域包括ケアシステムの構築」や「急性期後の受け皿となる病床の整備」、「在宅医療等を充実する必要」等が挙げられました。 前回改定では、「救急、産科、小児、外科等の急性期医療を適切に提供していくという観点」や「病院勤務医等の負担の大きな医療従事者の負担軽減」等を挙げ、急性期医療に重点配分する方針を継続しました。
「改定の視点」は前回とほぼ同様ですが、今回は「医療従事者の負担軽減」が盛り込まれました。
「検討の方針（案）」では、入院医療について「急性期医療の明確化」が挙げられています。

1　基本方針（案）について
○社会保障・税の一体化改革においては、消費税率を引き上げ、その財源を活用して、医療機能強化と、同時に重点化・効率化に取り組み、2025年（平成37年）に向けて、医療提供体制の再構築、地域包括ケアシステムの構築を図ることとされている。
○医療機関の機能分化・強化と連携に当たっては、患者が必要な医療を受けられない事態が生じないよう、急性期後の受け皿となる病床を整備し、在宅医療等を充実する必要。
○診療報酬と補助金を適切に組み合わせつつ、医療法改正による対応に先駆けて、診療報酬改定に取り組む必要。
○平成26年度診療報酬改定において、入院医療・外来医療を含めた医療機関の機能分化・強化と連携、在宅医療の充実等を取り組む。

2　重点課題（案）について
①　医療機関の機能分化・強化と連携、在宅医療の充実等
○社会保障・税一体改革において、消費税率を引き上げ、その財源を活用して、医療の機能強化と、同時に重点化・効率化に取り組むこととされている中、入院医療・外来医療を含めた医療機関の機能分化・強化を連携、在宅医療の充実等に重点的に取り組む。

☆次年度は診療報酬改定、平成27年度は介護報酬改定を控えています。制度に変化があってもMSWとして「やるべき仕事」は変わりませんが、仕事の手順や押さえ所には影響があります。より円滑に支援を行う為、常に動向には注意していきましょう。
（個人的には、インターネットのスタート画面をWAMNETにし、毎日自然に情報が押さえられる様にしています。もしよければ試してみては如何でしょう？）　　**企画推進・渉外担当理事　（佐賀関病院）　高橋　勝**

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　理事会だより　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

2013. 9. 19　第7回理事会（別府リハビリテーションセンター）・公開セミナー　・学術アンケート
2013. 10. 10　第8回理事会（ホルトホール大分）・平成26年度九州医療ソーシャルワーカー研修会エージェント決定　・公開セミナー　・地区コミ会議
2013. 11. 14　第9回理事会（ホルトホール大分）・公開セミナー　・学術アンケート　・災害SWインタビュー調査／災害SW研修
2013. 12. 12　第10回理事会（ホルトホール大分）予定

役員動向
「日本脳外傷友の会　第13回全国大会2013inおおいた」に参加をしました。高次脳機能障害者の認知は社会の中で広まっているも新たな課題として社会参加、職場復帰、復学を目指す際に社会技能、社会的交流の実践的集団訓練等、医療リハでの実施が難しい状況が話されていた。私達が高次脳機能障害者を支援する際に、その人となりを考え必要に応じ制度や地域の支援体制に繋げていけるように関わりを持ちたいと今回の参加を通し改めて考えました。　**理事（湯布院厚生年金病院）繁田　聖子**

新入会者の紹介
（H25.9～H25.11）
・城　亜由美（高田中央病院）
・渡邉　久之（大分県厚生連鶴見病院）
・井口　桜子（大分県済生会日田病院）

今後、ご意見・ご不明な点等は遠慮なく下記事務局へ、お問い合わせ下さい。

■ 大分県医療ソーシャルワーカー協会　事務局
〒874-8611 大分県別府市鶴見1026-10社会福祉法人農協共済別府リハビリテーションセンター　総合連携部
地域連携課内 TEL：0977-67-1711/FAX：0977-27-8668/URL http://oita-msw.com/Mail　oita-msw@oita-msw.com